

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第8回 大切な情報や経験の共有

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

日本政府は5月11日が期限だった新型コロナウイルス感染症拡大に対する3回目の緊急事態宣言を東京都、京都府、大阪府、兵庫県で31日まで延長するとともに愛知県、福岡県も対象に加えることを決めました。大型連休を挟んで実施してきた宣言や蔓延防止等重点措置にもかかわらず、8日には14道県で新規感染者数過去最多を更新し、同日の新規国内感染者数は7246人を記録。東京都では1121人となり、大阪府と共に1000人を超すなど、感染拡大は勢いを増しています。17都道府県では人口10万人当たりの療養者数が政府の対策分科会が示すステージIV（爆発的感染拡大）に達しています。

このコラムが全国日本語学校連合会のホームページに掲載されるまでに、この数字が緩和されていけばいいのですが、この数字を見ると、大阪府など関西地区ではすでに医療崩壊が起きています。同府の状況は、人口比を考えれば、1日に4000人以上の死者を出して世界最大の感染状況となっているインドに匹敵する数字です。

これまでは、感染拡大を人ごとのように考えている人が多かったのですが、感染力が強い変異株への置き換わりもあり、日本国内で生活する1人ひとりの周辺にじわじわと迫ってきているような気がします。

そこで、私自身の周辺で起きたコロナ感染関係の事例を紹介してみましよう。

私は4月11日から14日までの予定で佐賀市にある長女の家滞留していました。翌日帰京予定の13日、東京で留守番をしながらオンラインと通勤のハイブリッドで仕事をしている次男からLINEが来ました。「昨日(12日)会社で1日中並んで仕事をしていて上司が陽性になった。ボク(次男)が濃厚接触者になる可能性がある。感染しているとイケないの
で、自宅に籠もっているが、お父さん(私)たちは14日に東京の家へ帰ってこない方がいいよ」という内容でした。

私は19日に東京の病院で持病の診察を予約してあるだけで、それまでは佐賀でリモートによる仕事や生活ができる状況でしたので、帰京を18日に延ばすことにしました。予約してあった航空会社に電話したところ、「コロナが理由で搭乗を見合わせるならキャンセル料はかかりません」ということなので、14日のフライトはキャンセルしました。18日の予約状況はガラガラだったので、特に予約はせず、福岡空港にふらっと行って、空いている便に乗って帰京しました。

次男は保健所から「上司の濃厚接触者」に指定されたので、PCR検査を受けたところ、

幸いにも陰性でした。それでも、上司と会った12日から2週間後にあたる26日までは隔離生活を余儀なくされます。東京の自宅に帰ると、リビングには消毒用のアルコールティッシュなどが置いてありました。2階の自室に籠もっている次男とは直接顔を合わせず、LINEや電話で健康状態を確認するとともに、26日までの生活方法を相談しました。

我が家は元二所帯住宅だったので、洗面所、風呂、トイレは2つずつあります。次男とは違う設備を使うことにしました。一般の家では残念ながら、こうした棲み分けは難しいと思います。それでも、廊下や階段、その他の部屋で生活するために歩くルートが重なることがあるので、家の中でも常にマスクをつけ、ドアノブや電気のスイッチなど、触ったところは常に消毒しながら生活しました。次男の食事は、階段の上の廊下に置いておき、LINEでそのことを伝えるようにしました。我が家では次男を含め、幸いにも誰も発症しませんでした。が、帰宅してから隔離生活が終わるまでの9日間は、息が詰まるような毎日でした。

実は、昨年12月にも家内が高熱を出しました。コロナ感染が広がってから、「発熱相談センター」の電話番号を書いて部屋の中に貼ってあったので、すぐにそこに電話し、その指示でPCR検査を受けました。この時も隔離生活の準備をしましたが、陰性でただの風邪とわかり、事なきを得ました。ただの発熱や陰性の濃厚接触者などでこの状況ですから、感染者や発病者が確認され、自宅療養している場合は、本人ばかりでなく、ご家族や共同生活者の生活、精神状況は大変深刻なものだと思います。ことに、医療ひっ迫が続いている大阪府などでの生活は並大抵のものではないでしょう。

私が体育会OB会連合会の副会長を務めている大学のある運動部では4月にクラスターが発生しました。幸い重症者は出ていませんが、陽性者は80人を超えました。同部の部員の多くは、体育会各部の部員や海外からの留学生が入っている学生寮に入居しています。日本人学生も全員が地方から来ているため、すぐに自宅に帰ることはできず、地域の病院も飽和状態のため、発症していない部員は寮から出ることができません。

幸いなことに、発症者やその他の陽性者はほとんど同じ階の住人だったため、大学はこの階を他のフロアと隔離し、風呂やトイレ、食堂を別け、感染者と他の学生の生活圏を完全に分離することができました。大学では、運動部の活動にあたっては、厳重なルールを作り、練習中ばかりでなく、ミーティングや着替えのやり方、部活動帰りの複数人での食事の禁止などを保健所や医学部教授の指導の下で徹底して行ってきました。しかし、一部の部員のちょっとした気のゆるみから、感染が急拡大したようです。結局、ウイルスがどこから持ち込まれたかはわかりませんでした。

こうした経験から、私は自分の生活圏に緊急事態宣言が出ている間は人との接触を極力しないようにしています。例えば、会議や会合、打ち合わせは極力オンラインにして自宅で行います。どうしても出かけて行かなければならない場合は、自家用車で出て、外部の人との接触を極力少なくします。公共交通機関を使う場合は、電車やバスに乗る距離はできるだ

け短くして、歩く距離を増やします。タクシーは原則使いません。外食は一切せず、自宅で食事をつくれな場合は、短時間で総菜などを買ってくるか、出前、配達を注文します。食事以外の買い物も原則、インターネット販売を利用します。

そうしたことを心掛けることによって、自分がもし感染していた場合の拡散予防になりますし、自身が人からウイルスを受け取る機会を極力少なくすることができます。しかし、それでは運動不足になるので、暇な時間は散歩することにしてます。マスクをして誰とも話さず、黙々と1時間から1時間半ほど歩きますが、そうすることによって、知らなかった近所の道を探検したり、コロナ禍で変わっていく街の様子を観察することもできます。

この前のコラムで、この1年間でコミュニケーションツールなどは10年分の進歩があったことを紹介しました。コロナ感染症対策で社会は大きく変わりましたし、ここで培った習慣は、ポストコロナの時代を迎えることができても、今後の感染症対策や新しい生活習慣の構築に向けて大きな財産となることでしょう。

今回は私の身の回りのコロナ関連の話題を提供しましたが、こうした情報や事例の共有は大切です。頭の中だけで考えているより、いざという時に素早く適切な判断ができるでしょう。新しい状況にどう対処していくかを考え、身に着けていくことが大切です。

当面はリアルに人に会うのは避けた方がいいですが、様々なメディアから情報を得たり、これまで使っていなかったコミュニケーションツールでなかなか会えない友人や家族と情報交換や経験の共有をすることが、自分の身を守ることになり、コロナ禍を早く終わらせることになるでしょう。そして、ポストコロナがどういう社会になるかを見極めるきっかけになるものと思います。